研究報告第44号
G11－02

進路を考えることができる能力の育成に関する研究(2)

―中学校における進路指導―

1987・3

山形県教育センター

（資料整理カードG11－02）

研究報告書第４４号（昭和６２年３月刊）

進路を考えることができる能力の育成に関する研究(2)

―中学校における進路指導―

山形県教育センター

目　　次

Ⅰ　研究の目的と趣旨
1. 研究の目的
2. 研究の趣旨
Ⅱ　研究の手順と調査の方法
1. 研究の手順
2. 調査の方法
Ⅲ　調査結果から
1. 進路指導に関する教職員の共通理解と協力体制について
2. 進路指導に関する係の運営組織への位置づけと，学校の進路指導の現状について
3. 進路指導の悩みとその相談相手について
4. 進路指導係に期待することについて
5. 生徒の進路についての親と教師の意識や考え方について
6. 進路指導のねらいとその達成について
7. 進路に関する学習を小学校高学年から取り上げることについて
8. 校内における進路指導の研修と研修成果の活用について
9. 学校群による調査回答の比較
Ⅳ　のぞましい進路指導を行うために
1. 進路指導全体計画の見直しと改善
2. 進路指導体制の見直しと改善
3. 教職員の共通理解と協力体制
4. 進路指導に関する研修
Ⅴ　研究のこれからの課題
1. 小学校・中学校・高等学校の一貫した進路指導
2. 高等学校における進路指導

研　究　の　概　要

1　研究の目的

本県中学校の進路指導に関する実態をとらえ，その問題点を明らかにして改善の方策を探る。

2　研究の方法

進路指導について特に意欲的に取り組んでいる五つの中学校を訪問し，聴き取り調査を行った。そこで得た資料をもとに，県内全中学校を地域や規模別で無作為に抽出した49校の校長・教頭，教諭，養護教諭，講師を対象に，下記の(1)～(3)について質問紙調査を行った。結果を分析して問題点を明らかにし，進路指導改善の方策について考察する。

(1)　進路指導のすすめ方等

(2)　進路指導体制

(3)　進路指導の現状

3　研究の内容

(1)　調査結果から　――本県の中学校における進路指導の実態――

ア　進路指導のすすめ方等

○　進路指導の全体計画が，教師の日常的実践のための指針として効果をあげているとは言い難い。

○　1，2年生の場合，「学級指導」における進路指導のための授業時数が不足している。

○　「生きがい」を見いだせる進路指導ということについては，多くの教師が賛成である。

イ　進路指導体制

○　進路指導係に対して，多くの教師は「進路指導に必要な資料や情報の収集と提供」を期待しており，業務の中核となる「連絡調整及び指導・助言」についてはそれほどのぞんでいない。

○　進路指導上の悩みについては，同学年の主任や担任が相談相手となることが多い。

○　進路指導主事(係)としての役割を十分に果たしている学校は，あまり多くない。

ウ　進路指導の現状

○　高等学校への進学指導と，「生きがい」を見いださせる本来の進路指導の間で苦悩する教師が少なくない。

○　教師間の共通理解や協力体制は十分といえず，生徒がどの教師にも相談できる環境におかれていない。

○　進路指導に関する研修を実施している学校ほど，指導体制等の面で効果が上がっている。

(2)　のぞましい進路指導を行うために　――改善のための考察と提言――

ア　進路指導の全体計画を吟味し，実践に結びつくように配慮する。

イ　進路指導主事と進路指導係の機能を充実する。

ウ　進路指導についての共通理解をはかり，協力体制を確立する。

エ　進路指導に関する研修を実施し，教師の進路指導についての理解と意欲を高める。

4　研究のこれからの課題

小学校・中学校・高等学校の一貫した進路指導という観点から，高等学校の進路指導について調査し考察する。

はしがき

生徒は生きるたくましさ，生きる活力をもっている。ただ，それを未来へ向けてどう結びつけ，発揮していけば自己実現の生き方につながるのかわからない生徒がいるのではなかろうか。

全国教育研究所連盟は，昭和58年度から3か年計画で，全国の小，中，高等学校の教師を対象にして進路指導改善の方針に関する調査を行った。

その結果をみると，小学校の第一位が「勤労体験を与える」，中学校・高等学校は「将来の職業や生き方を考えさせる」であった。このことからもうなずけるように，いま中学校，高等学校の進路指導の内容で改善していかなければならないことの最大の課題がこの点にあるといえる。

たしかに最近の子どもたちには，自分の将来への夢やあこがれがなく，尊敬する人物も持たず，もの事をなし遂げる根気強さは劣っているといわれている。しかしながら，いまの子どものすべてがそうだという決めつけは許されるものではない。

この子どもたちに何を教え，導くと将来の職業や生きることについて考え，生きるよろこび，生きるめあてをもつようになるのであろうか。

文部省の調査によると昭和60年度の全国の高等学校における中途退学者は11万5千人にも及ぶという。これらの生徒達は，将来の職業や生きることについて真剣に考え，高等学校へ進学したのであったろうか。

中学校の進路指導を取りまく環境は実にきびしい。しかし，それは中学校における進路指導の真の姿とは何か，生徒の将来の職業や生き方について考えるようにするには，何を材料にどんな手だてを講じて指導を進めればよいかといった具体的な課題を一つ一つ解決し，積みあげることによって解決の方法が見えてくるものといえよう。

こうした意味で山形県教育センターは，進路指導改善のために役立つことを願って昨年度よりこの研究に取り組み，本年度は県内中学校教師の進路指導の取り組みや意識等について調査を行い，その結果を分析・考察し改善の方策を考えてみた。

不備な点については建設的な御意見を願い，本報告書を各学校における進路指導改善のために活用いただくことを希望したい。

この研究に御協力いただいた学校並びに関係された方々に深く感謝申しあげます。

1987年3月

山形県教育センター所長
金　森　　武

研究担当者

指導主事	高　橋　惟　文
〃	高　橋　静　夫
〃	大　泉　芳　光
〃	中　鉢　鉄太郎
〃	遠　藤　正　男

目　　次

Ⅰ　研究の目的と趣旨 …… 1
1.　研究の目的 …… 1
2.　研究の趣旨 …… 1
Ⅱ　研究の手順と調査の方法 …… 3
1.　研究の手順 …… 3
2.　調査の方法 …… 3
Ⅲ　調査結果から …… 4
1.　進路指導に関する教職員の共通理解と協力体制について …… 4
2.　進路指導に関する係の運営組織への位置づけと，学校の進路指導の現状について …… 6
3.　進路指導の悩みとその相談相手について …… 9
4.　進路指導係に期待することについて …… 11
5.　生徒の進路についての親と教師の意識や考え方について …… 13
6.　進路指導のねらいとその達成について …… 14
7.　進路に関する学習を小学校高学年から取り上げることについて …… 18
8.　校内における進路指導の研修と研修成果の活用について …… 19
9.　学校群による調査回答の比較 …… 22
Ⅳ　のぞましい進路指導を行うために …… 27
1.　進路指導全体計画の見直しと改善 …… 27
2.　進路指導体制の見直しと改善 …… 27
3.　教職員の共通理解と協力体制 …… 28
4.　進路指導に関する研修 …… 29
Ⅴ　研究のこれからの課題 …… 30
1.　小学校・中学校・高等学校の一貫した進路指導 …… 30
2.　高等学校における進路指導 …… 30

Ⅰ　研究の目的と趣旨

1　研究の目的

本県中学校の進路指導に関する実態をとらえ，その問題点を明らかにして改善の方策を探る。

2　研究の趣旨

最近の中学生は，自己中心的で他人を思いやるとか，相手の立場にたってものごとを考えるといったいわば心のぬくもりにかかわる情緒面が健全に育っているとはいい難いといわれている。

そうした心情を引きおこした背景には，種々の要因が複雑に絡み合いその因果関係を即これと断定するわけにはいかないが，少くともその一つに急速な科学技術の進展と相まって成長した高度経済がどの家庭にも影響を及ぼし，家庭生活や社会生活，そして人間の心情にも大きな変化を与えたことは間違いないと思われる。

その変化が，ものの豊かさ；飽食の時代，価値観のちがいなどと，この時代を反映した言葉を生むにいたった。そうした社会の中で育った子ども達がいまの中学生である。

いまある自分を理解し，職業というものを身近にとらえ，職業本来の意味を考えながら将来の人生設計を描く中学生は，果して何人いるだろうか。

このような状態にある中学生に対し，少しでも将来へ向けた生き方や人生に「生きがい」を見い出し人間として生きることの尊さを，是非この進路指導できちんと教え導き，そして育つのを見守ってやる必要があると痛切に思うのである。

中学生の進路指導は，生徒一人一人の自己実現をめざす生き方の指導であると考えるならば各教科や領域の指導と同等に大切に扱う必要がある。しかしながら，実際の指導となるとさまざまな要因が立ちはだかって思うように指導できないのも実情のようである。

そこで，当センターは昨年度から「進路を考えることができる能力の育成」を研究題目として研究に取り組んできた。

第１年次の昨年は，進路指導に関する実態把握ということから生徒（中学１年生，２年生，３年生），学級担任，進路指導主事の三者を対象に質問紙による調査を実施した。

（当センターの研究報告書・第３８号・Ｇ１１－０２・「進路を考えることができる能力の育成に関する研究(1)」－－中学校における進路指導－－）

それを要約すると次の四つにまとめることができる。

(1)　生徒の進路についての学習，すなわち自己理解，職業に関する理解，そしてこれからの人生設計におけるものの考え方は，学年進行と並行して程度の差はあるにしてもわずかずつ深まってきている。しかしながら，進路を考え選択することのできる能力を身につけるまでに育っているとは言い難い。

(2)　多くの生徒は学習や進路のことで悩みを抱えている。しかし，悩みをもちながらも自分の進路方向の選択と密接に関係する自己理解，職業理解，人生設計の進路学習には強い意欲をもっている。

また，「学級指導」で行う進路学習もこれらの三つについて調和をはかりながら授業を行った場合，進路を考えることができる能力は一段と高まる事実も見い出すことができる。

(3) 学級担任を対象とした調査では，「学級指導」における進路指導の各領域内容の中で指導が落ち込んでいる部分がみられる。特に性格検査などを活用した自己理解の指導や進路計画の作成とその吟味をとおした人生設計の落ち込みが目立つ。

このことから，進路学習が必ずしも調和のとれていないことがわかる。

(4) 進路指導主事を対象とした調査では，大方の学校が進路指導の全体計画や学年毎の指導計画はつくられているとこたえている。しかし，教職員の進路指導についての共通理解の無いこと，計画された授業時数では必要とする内容の指導ができないこと，さらに現状では，進路を考え自ら選択できる能力を生徒につけることは，はなはだ難しいことであると大半がこたえている。これらのことからも進路指導の当面する課題の多いことと早急に解決をはからなければならないことがわかる。

そこで今年度は，昨年度の研究ですでに明らかになっている問題点とこの研究で明らかにした問題点とをつき合わせ，本研究のねらいである「進路を考えることのできる能力」の育つことを阻害する要因は何か突きとめ，それの解決をはかるための方策について探る。

II　研究の手順と調査の方法

1. 研 究 の 手 順

(1) 進路指導に意欲的に取り組んでいる五つの中学校を対象に，聴き取り調査を実施する。

(2) 聴き取り調査で得た資料と昨年度の研究から継続している課題事項等を検討して質問紙を作成する。

(3) 調査対象校を無作為に抽出する。

(4) 質問紙調査を実施する。

(5) 質問紙を回収し，コンピュータで集計処理を行う。

(6) 集計結果を分析し，進路指導の問題点を明らかにする。

(7) 今年度明らかにした問題点と昨年度明らかにされた問題点をつき合わせて検討し解決に向けての手だてについて考察する。

(8) 進路指導改善の方策をまとめる。

2. 調 査 の 方 法

(1) 中学校の教師を対象とした質問紙による調査とする。

(2) 調査対象校の抽出と調査対象者

調査対象校は全中学校から地域と規模別を考慮して４９校（３４.３％）を無作為に抽出し，調査対象者は抽出した学校の校長・教頭，進路指導主事，教諭，養護教諭，講師の全員とする。

(3) 調査の実施方法

抽出した対象校へ質問紙を送付し，調査対象者が無記名で記入したものを個人ごと封入し，学校ごと一括して返送してもらい回収する。

(4) 調査の期日

昭和６１年１１月１７日（月）～１１月２９日（土）

(5) 調査対象者と回収割合

①	調査対象校数	４９校
②	調査対象者数	1,１２４名
③	質問紙の回収数	９９１通
④	回　収　率	８８％

※ おことわり

調査結果を考察の観点ごとに整理したため，質問調査の配列と各質問番号とが，調査実施時のものと一部異なることを御了承ください。

Ⅲ　調査結果から

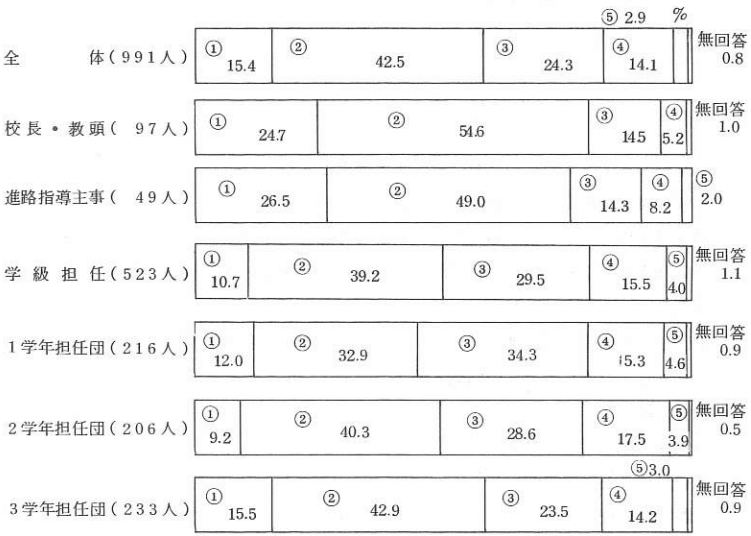
注

各帯グラフの校長・教頭，進路指導主事，学級担任，学年担任団のそれぞれの（人数）は，属性ごとに示してあるので，それらの合計は全体の（人数）と等しくはならない。

1　進路指導に関する教職員の共通理解と協力体制について

質問①　あなたは，あなたの学校の教職員が共通理解のもとに協力し合って，進路指導にあたっていると思いますか。

①思う　②大体思う　③どちらともいえない　④あまり思わない　⑤思わない



学校の教職員が共通理解のもとに協力し合って，進路指導にあたっていると「思う」とこたえた比率は，全体の15.4％ときわめて低く，これに「大体思う」を合わせた比率においても全体で57.9％にすぎない。

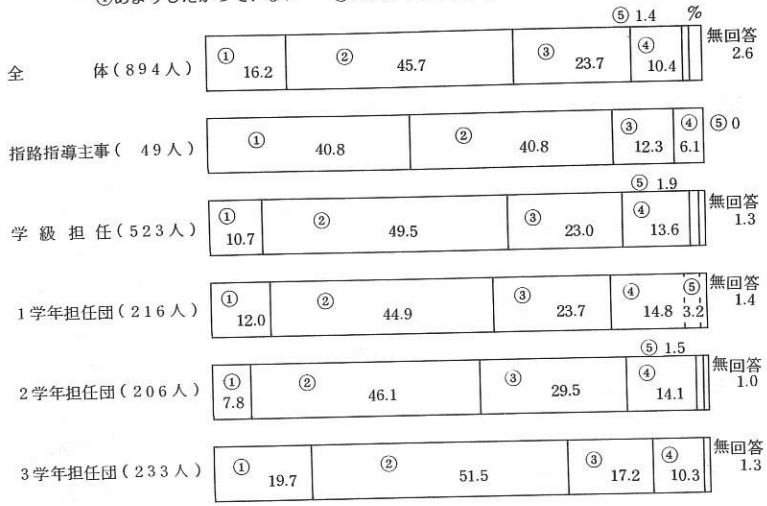
これを属性別にみると，現状をのぞましい状態とみているのは，校長・教頭 79.3％，進路指導主事 75.5％と比較的高い比率を示すが，学級担任では 49.9％となる。このことは，両者の進路指導についての現状認識にちがいがあることを示している。

各学年担任団におけるのぞましい状態の比率は，学年が進むにつれて高くなっており，各学年教職員の共通理解と協力体制がととのってきていることを示している。

質問②　あなたは，進路指導を進めるにあたって学校や学年の進路指導の目標・計画にしたがっていますか。

①したがっている　②大体したがっている　③どちらともいえない

④あまりしたがっていない　⑤したがっていない。



進路指導を進めるにあたって，学校や学年の進路指導の目標・計画に「したがっている」とこたえた教師は，全体の 16.2 ％であり，これに「大体したがっている」を合わせた比率は，全体で 61.9 ％である。

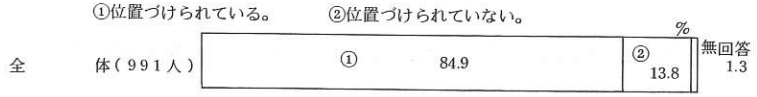
これを属性別にみると，3学年担任団が 71.2 ％と他の学年担任団より高い比率を示している。

一方，進路指導主事では，「したがっていない」「あまりしたがっていない」とこたえた比率を合わせると6.1％，「どちらともいえない」も 12.3 ％を示している。これは，進路指導主事の役割から考えてみると，注目すべきことであろう。

2　進路指導に関する係の運営組織への位置づけと学校の進路指導の現状について

質問③　あなたの学校では，進路指導に関する係（たとえば進路指導部等）が校務分掌として位置づけられていますか。

①位置づけられている。　②位置づけられていない。



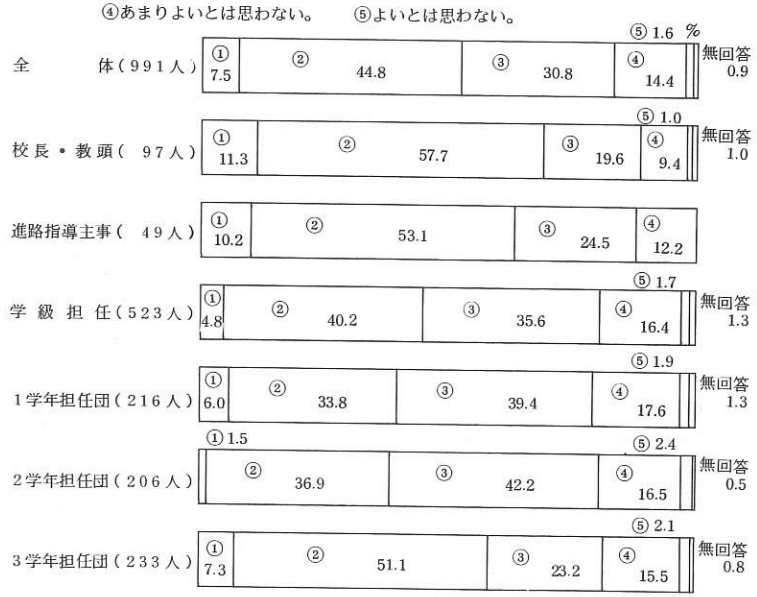
ここでは，「位置づけられていない」とこたえた教師が，全体で13.8％もいることに注目したい。

このことは，進路指導に関する組織，分掌体制が全体としてまだ十分でないということだけでなく進路指導についての意識の低さを表わしているといえよう。

質問④　あなたは，あなたの学校の進路指導の現状について，どう思いますか。

①よいと思う。　②大体よいと思う。　③どちらともいえない。

④あまりよいとは思わない。　⑤よいとは思わない。



学校の進路指導の現状を，「よいと思う」「大体よいと思う」ととらえている教師は，全体の52.3％である。

これを属性別にみると，現状をのぞましい状態とみているのは，校長・教頭 69.0％，進路指導主事 63.3％であるが，学級担任では 45.0％となる。学年担任団では，1学年担任団 39.8％，2学年担任団38.4％，3学年担任団58.4％である。

これらのことは，進路指導の現状がいかに多くの問題を抱えているかを示すものとみてよいだろう。

質問⑤　あなたは，あなたの学校の進路指導が第3学年中心に行われていると思いますか。

①思　う　②思わない　③わからない

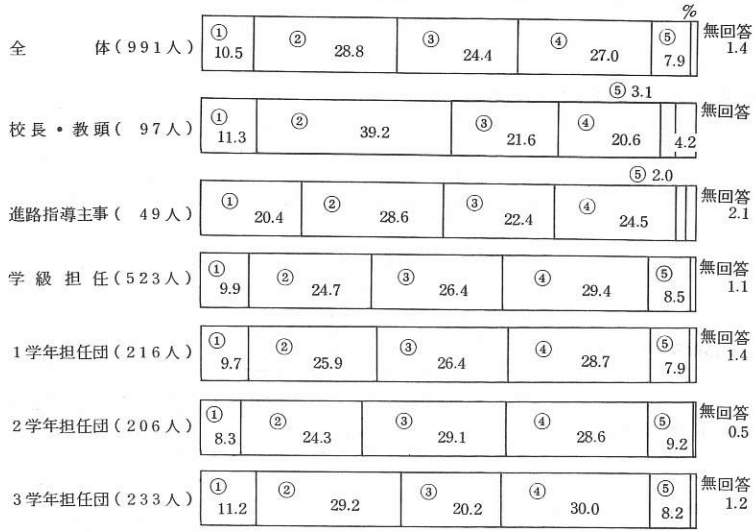
学校の進路指導が第3学年中心に行われていると「思う」とこたえた教師は，全体で60％を超えている。

この傾向は，学級担任においてより顕著にみられ，実に 66.0％を示している。これを6頁の質問④においてみられる進路指導の現状認識と併せて考えてみると，進路指導の本来の姿と現状にずれがあることがうかがえる。

質問⑥　あなたは，あなたの学校の生徒が進路の悩みについて，どの先生にでも相談できるようになっていると思いますか。

①思　う　②大体思う　③どちらともいえない　④あまり思わない

⑤思わない

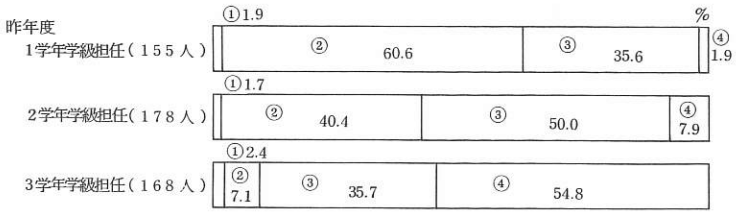


生徒が進路の悩みについて，どの先生にも相談できるようになっていると「思う」とこたえた比率は，全体の 10.5 %ときわめて低く，これに「大体思う」を合わせた比率においても全体で 39.3 %にすぎない。

これを属性別にみると，現状を望ましい状態とみているのは，1学年担任団 35.6 %，2学年担任団 32.6 %，3学年担任団 40.4 %にすぎない。

このことは，生徒が進路の悩みについて，どの教師にも相談できるようにはなっていない現状を示しているといえよう。

質問⑦ 昨年度，学級担任をされた方におたずねします。
あなたは，昨年度の「学級指導」において進路に関する授業を何時間行いましたか。
担当された学年の □ に番号を記入してください。
①0時間　②1～4時間　③5～9時間　④10時間以上

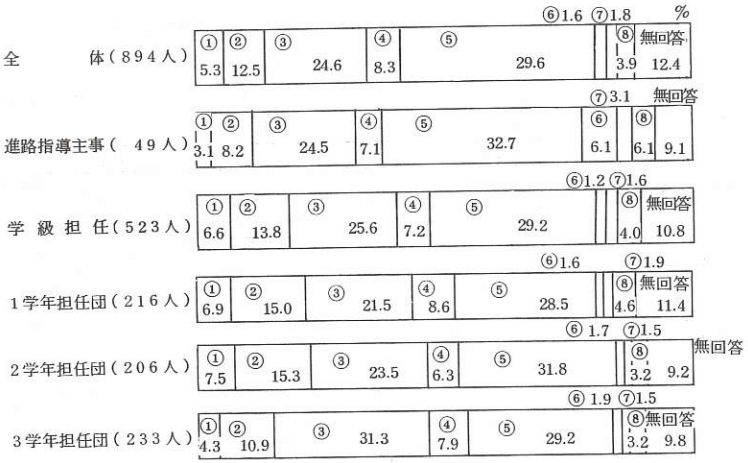


この結果は，「学級指導」における進路に関する授業時間数は学年が進むにつれて増加しているものの，進路指導が主に第3学年を中心に行われていることを明確に示しており，質問⑤にみられた結果を裏づけている。更に，質問④，質問⑥の結果にみられた，1学年担任団，2学年担任団におけるのぞましい状態の比率の低さもうなづけよう。

3　進路指導の悩みとその相談相手について

質問⑧ あなたは，進路指導のことで困ったり，悩んだりすることがあると思いますが，それは次のどの理由からですか。二つ選んでください。

① 進路指導の授業のすすめ方がわからない。
② 進路指導の全体計画にもとづいた指導とは，具体的にどうすることなのかわからない。
③ 希望する上級学校へ進学させたいのだが，生徒の学力が不十分である。
④ 生徒と親の進路希望が一致しない。
⑤ 生きがいを見つけて努力することが大事であることを教えても，生徒は無関心である。
⑥ 生徒の進路についての希望と，地元に残るよう教えてほしいという地域の願いの間に立たされている。
⑦ 困ったり，悩んだりすることがない。
⑧ その他（それ以外の理由があれば記入してください。）



注

質問⑧は２選択のため，実際の選択人数の割合はこのグラフに表示した数の２倍となる。

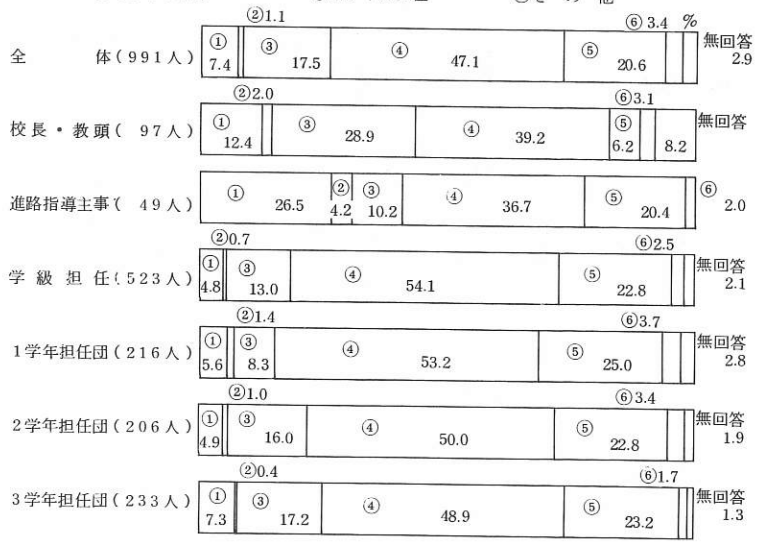
全体でみると，進路指導における悩みの理由としてこたえた比率が高いのは，⑤「生きがいを見つけて努力することが大事であることを教えても，生徒は無関心である」の２９.６％と，③「希望する上級学校へ進学させたいのだが，生徒の学力が不十分である」の２４.６％である。教師は進路指導において，その本質にかかわる悩みと進学指導の悩みという二つの大きな悩みをもっているといえよう。

この傾向は，属性別にみても同じであるが，前者は進路指導主事に若干高く，後者については学年が進むにつれて高くなっている。

①「進路指導の授業の進め方がわからない」と②「進路指導の全体計画にもとづいた指導とは，具体的にどうすることなのかわからない」は，ともに実際の進路指導の進め方に関する悩みである。実際に進路指導を担当する学級担任についてみると，①②を合わせて２０％を超えており，問題となるところである。

質問⑨　あなたは，あなたの学校の先生方が進路指導のことで困ったり，悩んだりしたとき，主として校内のどなたに相談していると思いますか。

①校長や教頭　②教務主任　③進路指導主事
④同学年の主任　⑤同学年の担任　⑥そ　の　他



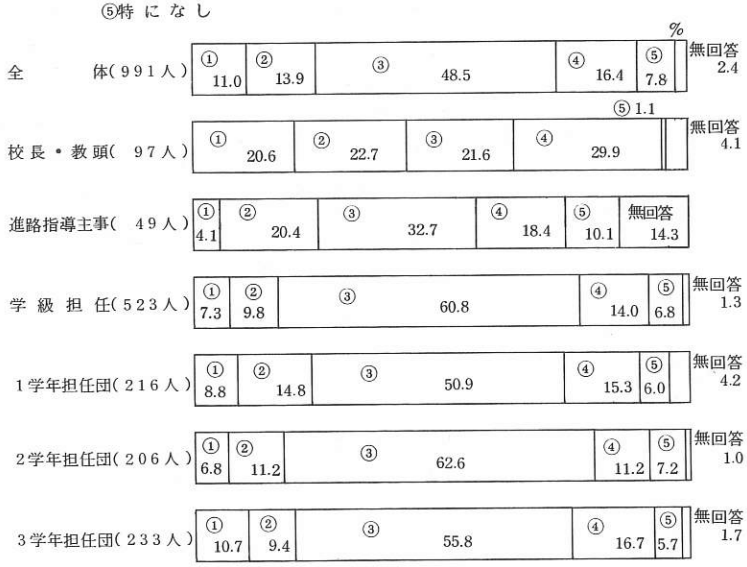
「同学年の主任」を相談相手にしていると思うとこたえた教師は，全体で４７.１％ときわめて多く，ほぼ半数に近い。この傾向は，学級担任においてより顕著であり，その比率は全学級担任の５４.１％を示しており，学年主任の果している役割は大きいといえる。これに，「同学年の担任」とこたえた比率を合わせると，実に７６.９％の学級担任が相談相手を同学年のなかに求めていることがうかがえる。

これに対し，「進路指導主事」とこたえた教師は，全体でも１７.５％にすぎない。特に，学級担任においては１３.０％であり，進路指導主事は相談相手としてあまり期待されていない。これは，進路指導主事みずからこたえた比率が，１０.２％にすぎないことをみてもうなずけることである。

４　進路指導係に期待することについて

質問⑩　あなたは，あなたの学校の進路指導係にもっとも期待していることは次のうちどれですか。

①進路指導の目標・全体計画の作成と改善
②各学年の指導計画の作成と改善
③進路指導に必要な資料や情報の収集と提供
④進路指導についての連絡調整及び指導，助言
⑤特　に　な　し

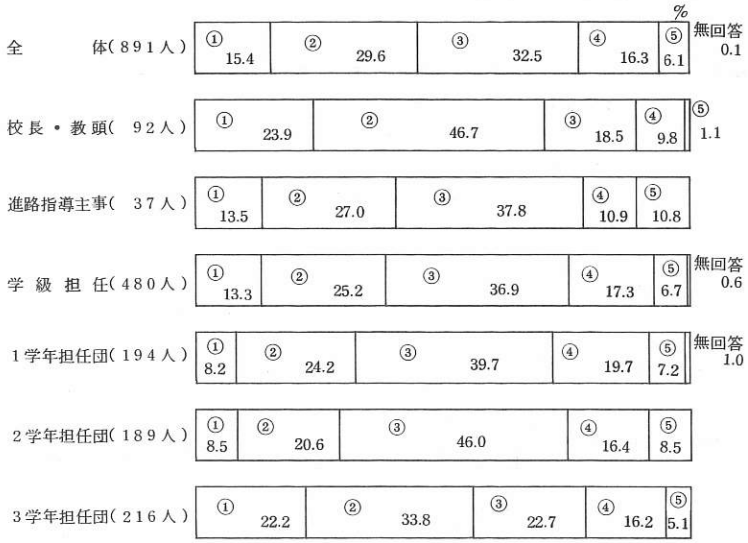


教師が進路指導係にもっとも期待していることは「進路指導に必要な資料や情報の収集と提供」が一番高く，全体の４８.５％になっており，「進路指導についての連絡調整及び指導，助言」は１６.４％と低い比率になっている。校長・教頭は，他と比較して，四つの選択肢に分散している。

質問⑪　質問⑩で①②③④とこたえた方におたずねします。あなたは，あなたの学校の進路指導係が，あなたの期待にこたえていると思いますか。

①思　う　　②やや思う　　③どちらともいえない

④あまり思わない　　⑤思わない



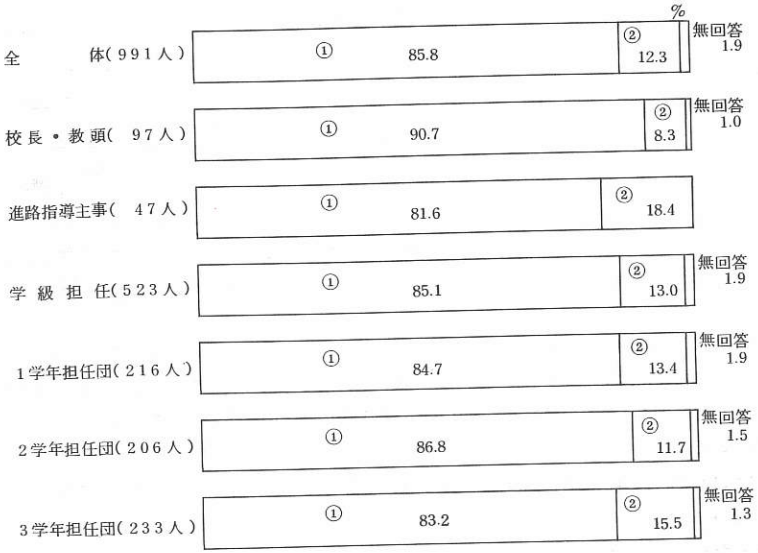
全体では，進路指導係が，期待にこたえているかどうかの質問に「思う」１５.４％，「やや思う」２９.６％であり，合わせると４５.０％になる。

「思う」，「やや思う」を合わせた比率は校長・教頭７０.６％，学級担任３８.５％となっており，特に校長・教頭と学級担任に意識のちがいが顕著である。１学年担任団３２.４％，２学年担任団２９.１％，３学年担任団５６.０％をみると，期待にこたえているという比率は３学年担任団が，学年担任団の中で一番高い。

５　生徒の進路についての親と教師の意識や考え方について

質問⑫　あなたは，生徒の進路について親の意識や考え方に問題があると思うことがありますか。

①あ　る　　②な　い



教師は，生徒の進路に関して，「親の意識や考え方に問題がある」とこたえた比率が８５.８％を示しているのに対し，「問題がない」とこたえた比率は１２.３％にすぎない。

質問⑬　質問⑫で①とこたえた方におたずねします。

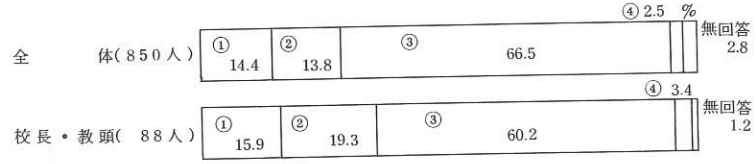
それはつぎのどの理由からですか。

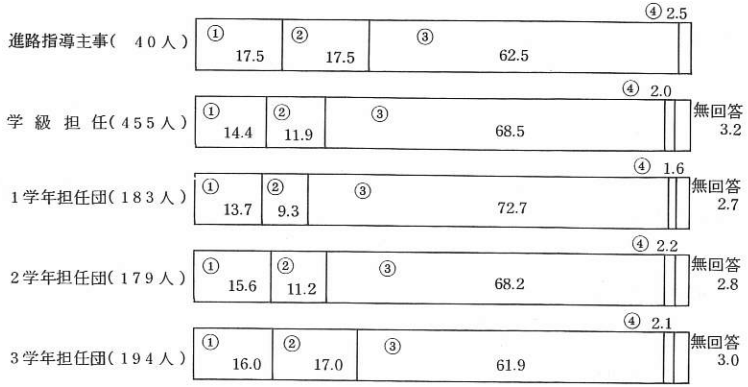
①親の一方的な考えで子どもの進路を決めようとする。

②子どもの言うがままに進路を決めようとする。

③親と子の話し合いがなされていない。

④子どもの進路について全く無関心である。





親の意識や考え方に問題があるとこたえた理由としては，全体で見ると「親と子の話し合いがなされていない」とこたえた比率が６６.５％であり，「親の一方的な考えで子どもの進路を決めようとする」とこたえた比率１４.４％を合わせると８０.９％が親と子の間での進路についての話し合いに問題があるとみている。

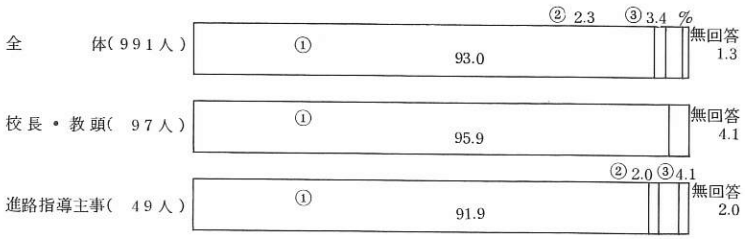
しかし，これは本研究の１年次に中学生を対象とした調査の結果，すなわち，中学生が「進路のことで親と意見が合わないので悩んでいる」とこたえたのが１０％程度であったことと比べてみると，両者の間に大きなずれがあることがわかる。

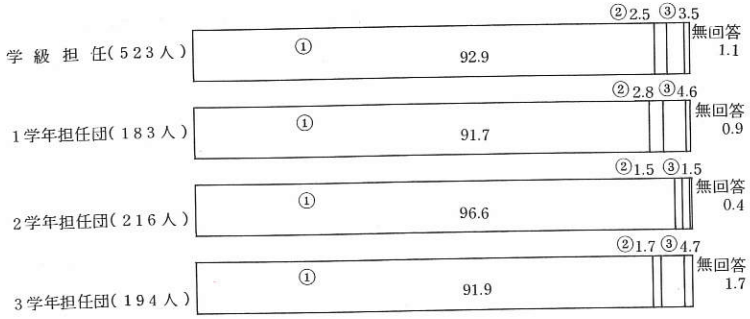
属性でみると，③については１年担任団７２.７％，２年担任団６８.２％，３年担任団６１.９％と学年がすすむにつれて若干減少している。

６　進路指導のねらいとその達成について

質問⑭　あなたは，進路指導というのは生徒が自分の個性を知り，それを職業に結び付けて考え，将来自分が果たす役割などを意識しながら「生きがい」を見い出し，進路方向が選択できるようにすることだと思いますか。

①思　う　　②思わない　　③わからない



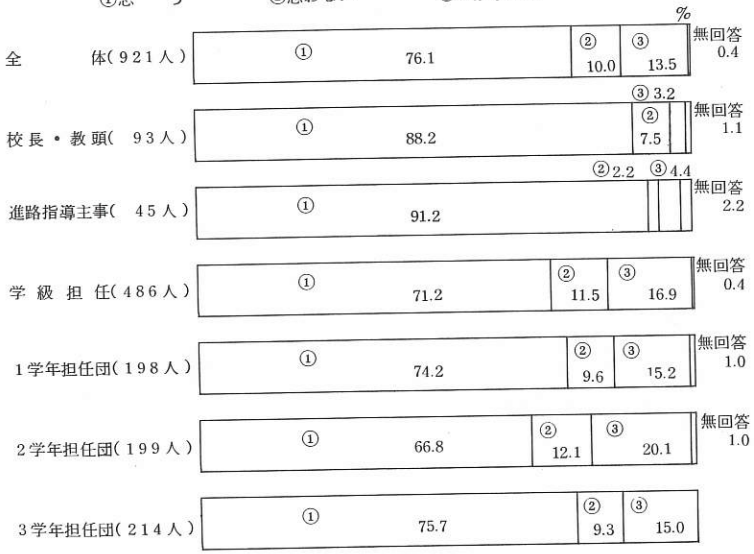


質問⑭では，９０％を超す教師が進路指導は本来「生きがい」を見い出し，進路方向の選択ができることであるととらえている。

質問⑮　質問⑭で①とこたえた方におたずねします。

あなたは，質問⑭にあげた進路指導のねらいどおりに生徒が育つとしたら，高等学校へ進学してからの中途退学や学業不適応の生徒が減ると思いますか。

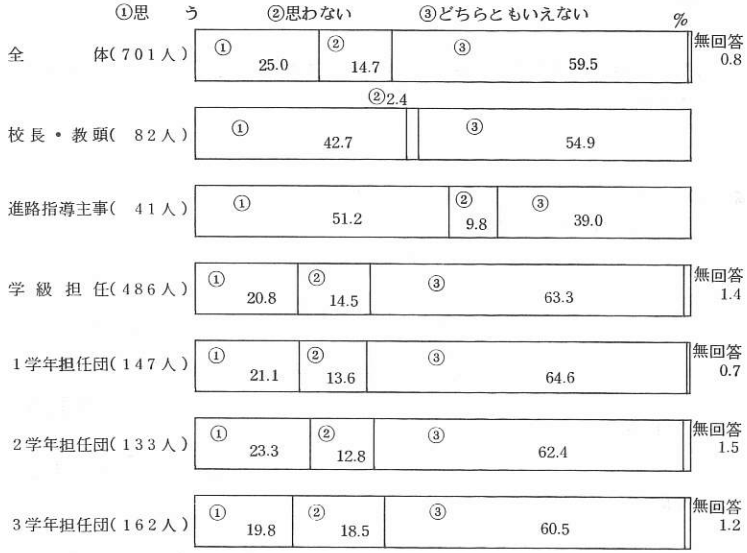
①思　う　　②思わない　　③わからない



質問⑮では進路指導のねらい通りの生徒が育ったとしても，高等学校へ進学してからの中途退学や学業不適応が減少すると「思う」とこたえた比率は，全体で７６.１％である。属性でみると，進路指導主事及び校長・教頭が特に高い。「思わない」，「わからない」とこたえた比率は学級担任及び学年担任団では２０～３０％であり，生徒が進路指導のねらいが達成できたとしても，高等学校へ進路後の生徒について不安を持っていることがうかがえる。

質問⑯　質問⑮で①とこたえた方におたずねします。

あなたは，あなたの学校で立てた進路指導の全体計画，学年毎の指導計画に沿って実践したとしたら，進路指導のねらいどおりに生徒が育つと思いますか。



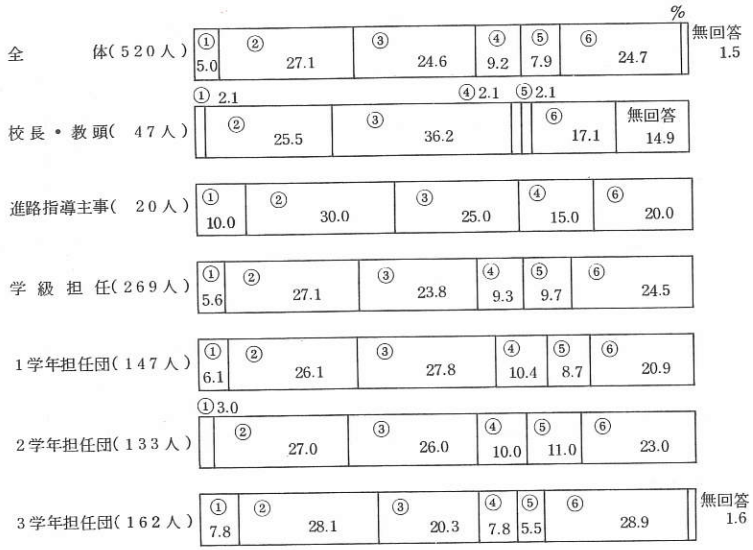
質問⑮で，進路のねらいどおりの生徒が育ったとしたら，高等学校へ進学してからの中途退学や学業不適応の生徒の数が減ると「思う」とこたえた７０１名が，質問⑯で，自校での進路指導の全体計画，学年毎の指導計画に沿って実践したとしたら，ねらいどおりの生徒が育つと思うかという質問では，「思う」２５.０％，「思わない」１４.７％の比率を示している。

これを属性でみると，「思う」とこたえた比率の多いのは進路指導主事５１.２％，校長・教頭４２.７％であるのに対して，学級担任は２０.８％にすぎない。「思わない」，「どちらともいえない」を合わせた比率は学級担任７７.８％，校長・教頭５７.３％，進路指導主事４８.８％にもなっており，校長・教頭，進路指導主事，学級担任の間に意識のちがいが見られる。このことは，進路指導の目標・計画，進路指導についての共通理解，協力体制など進路指導に関していろいろな問題を抱えていることがうかがえる。

質問⑰　質問⑯で②，③とこたえた方におたずねします。

それは，下記のうちどれに近い理由からですか。

①目標や計画に問題がある。
②進路指導に充てる全体の授業時数が少ない。
③教職員の進路指導についての理解不足。
④教職員の進路指導についての協力体制が弱い。
⑤進路指導のすすめ方がわからない。
⑥その他（それ以外の理由があれば記入ください。）



質問⑯で，「思わない」，「どちらともいえない」とこたえた５２０名について，その理由をみると，「進路指導に充てる全体の授業時数が少ない」２７.１％，「教職員の進路指導についての理解不足」２４.６％の比率を示している。

「進路指導に充てる全体の授業時数が少ない」とこたえた比率は，校長・教頭，進路指導主事，学級担任，各学年担任団とも２６～３０％であり，およそ３分の１が授業時数の不足を訴えている。

「進路指導の進め方がわからない」とこたえた比率は低いが，学級担任では，１０％近くを示していることは注目しなければならない。

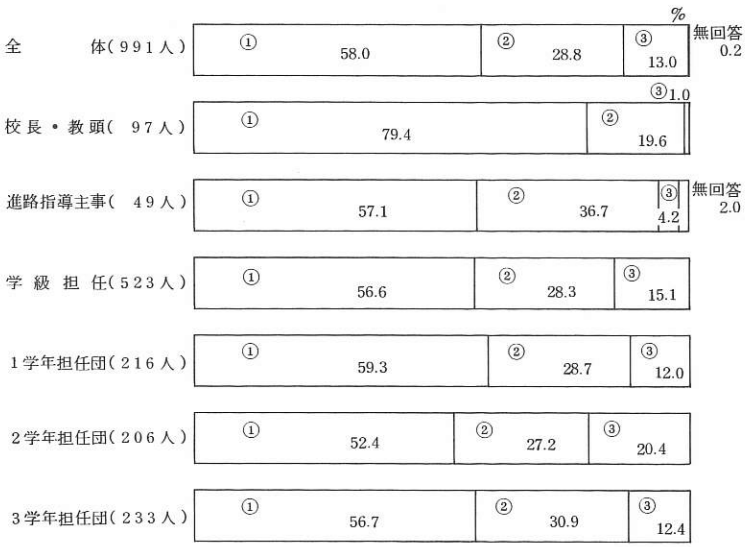
「教職員の進路指導についての理解不足」と「教職員の進路指導についての協力体制が弱い」を合わせると，進路指導主事４０.０％，学級担任３３.１％，校長・教頭３８.３％を示していることは，現在行われている進路指導の問題点としてあげられる。「目標や計画に問題がある」とこたえた進路指

導主事の１０.０％，「進路指導の進め方がわからない」とこたえた学級担任の９.７％は，後述の質問⑳でも明らかなように進路指導についての研修会がもたれなかったり，進路指導に対する教職員の共通理解や協力体制に問題があることを浮彫りにしている。

７　進路に関する学習を小学校高学年から取り上げることについて

質問⑱　進路についての問題は，小学校の高学年から取り上げるべきだという意見がありますが，これについてあなたはどう思いますか。

①そう思う　　②そう思わない　　③わからない



質問⑲　質問⑱で①とこたえた方で「そう思う」理由は下記の中でどれにもっとも近いですか。

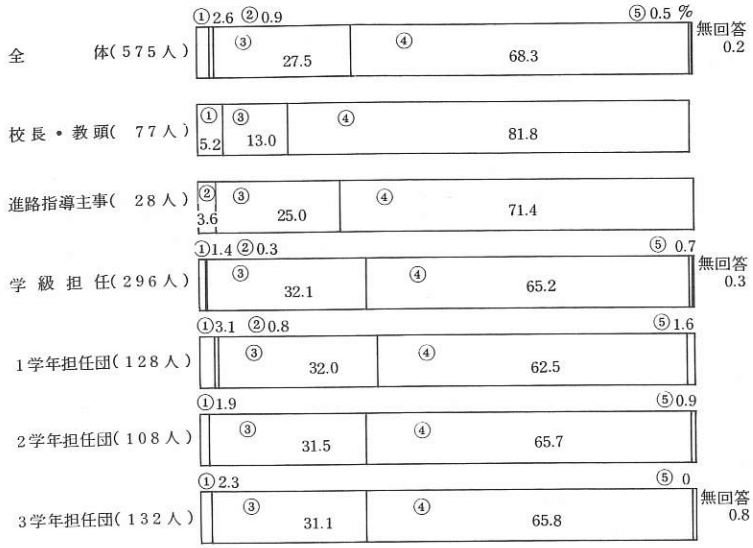
①子どもの身心の発達状況から見て，進路指導をはじめるのに適している。

②中学校の進路指導に充てることのできる授業時数だけでは生徒に必要な進路指導の内容を学習させることができない。

③中学校は，ともすると目前の進学指導に力点がおかれるので，将来に向けての幅のある考え方は小学校から育てるのがよい。

④将来，自分がどんな職業につきどう生きるかという夢や希望は，進路についての学習の基礎になるものであるから，小学校から育てておく必要がある。

⑤そ　の　他



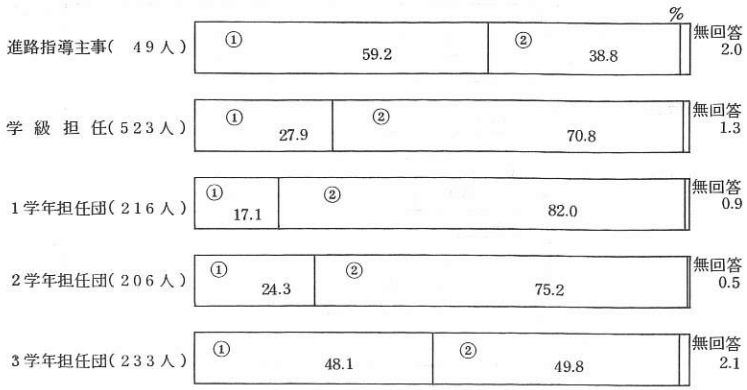
進路についての指導は，小学校の高学年から取り上げるべきだという意見に「そう思う」とこたえた比率は全体で　５８.０　％である。なかでも校長・教頭は７９.４％と他と比較して高い比率である。

進路についての指導は，小学校の高学年から取り上げるべきであるという意見の理由として「将来自分がどんな職業につきどう生きるかという夢や希望は，進路についての学習の基礎になるものであるから，小学校から育てておく必要がある。」とこたえた比率が全体で６８.３％になっている。理由のなかでも，「中学校は，ともすると目前の進学指導に力点がおかれるので，将来に向けての幅のある考え方は小学校から育てるのがよい」とこたえた比率が，全体で２７.５％を示し，特に学級担任，学年担任団の３分の１がそうこたえていることは注目すべきである。

８　校内における進路指導の研修と研修成果の活用について

質問⑳　あなたは，あなたの学校で今年度（１０月末現在）行われた進路指導に関する研修に参加したことがありますか。

①参加したことがある。　　②参加したことがない。

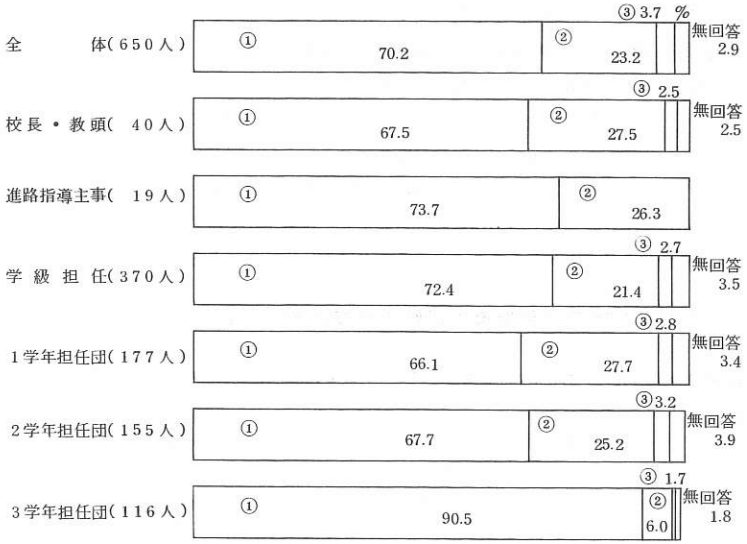


質問㉑ 質問⑳で②とこたえた方におたずねします。それはなぜですお。

①研修がもたれなかったから。

②研修が特定の学年だけのものであったから。

③研修は開かれたが，都合により参加できなかったから。



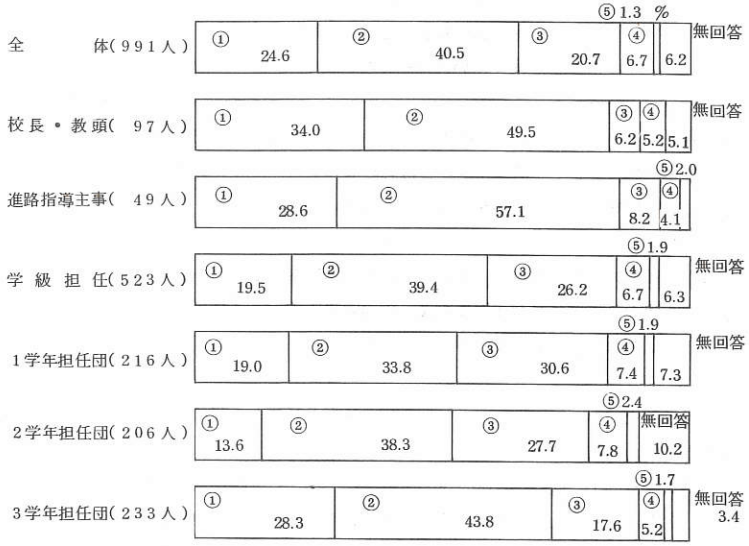
研修に「参加したことがある」とこたえた教師が，全体で３３.２％である。属性でみると，校長・教頭，進路指導主事はいずれも５０％台で，学年担任団は平均するとおよそ３０％である。研修に参加したことがない理由として「研修がもたれなかったから」とこたえた比率が全体で７０.２％になっている。研修がもたれていない比率が高いことと研修に参加したことがある比率が低いことで，進路指導の研修が十分なされていないことが明らかである。

質問㉒ あなたは，あなたの学校の職員会議や研修会で進路指導について話し合われたことが，指導に生かされていると思いますか。

①生かされていると思う。　②大体生かされていると思う。

③どちらともいえない。　④あまり生かされていないと思う。

⑤生かされていない。



職員会議や研修会で進路指導について話し合われたことが，指導に「生かされていると思う」，「大体生かされていると思う」とこたえた比率が全体で６５.１％である。属性でみると，校長・教頭８３.５％，進路指導主事８５.７％，学級担任５８.９％になっており，校長・教頭，進路指導主事と学級担任に認識のちがいがみられる。

9　学校群による調査回答の比較

今回の調査は，県内の各中学校が現在行っている進路の取り組み状況と指導の実際，そしてそれに関連する諸問題について教職員の一人一人が自分の眼でとらえたことや感じていること，あるいは意識や考え方をそのまま回答するものである。

その中の質問④は，いま自分の学校の進路指導が妥当なものであるか否かを問うたもので，進路指導の問題性の有無にかかわるこれら一連の質問の中核をなしている。

> 質問④　あなたは，あなたの学校の進路指導の現状について，どう思いますか。
>
> ①　よいと思う。
> ②　大体よいと思う。
> ③　どちらともいえない。
> ④　あまりよいとは思わない。
> ⑥　よいとは思わない。

この質問で「よいと思う」「大体よいと思う」の選択肢を選んだ回答数を正（プラス）の傾向，反対に「よいとは思わない」「あまりよいとは思わない」の選択肢を選んだ回答数を負（マイナス）の傾向として，各学校を次に示す基準をもとに三つの群に分けた。

①　正の傾向の回答比率が７０％以上，負の回答比率が１０％未満の学校
②　正の傾向の回答比率が４０％未満，負の回答比率が２０％以上の学校
③　正の傾向の回答比率が４０％～６９％の学校

①の学校群をＸ群，②の学校群をＹ群とし，Ｘ群とＹ群との間に各質問についての回答比率にどのような差があるか比較を試みた。

その結果，質問①，②，③，⑤，⑥，⑪，⑳，㉒　について顕著な差のあることがわかった。。表１は，これらを示すものである。さらにＸ群とＹ群のちがいを明らかにするためにダイヤグラムに表わした。それが図１である。このダイヤグラムの表わし方は，Ｘ群もＹ群も正（プラス）の傾向に反応している比率の合計と負（マイナス）の傾向に反応している比率の合計とを相殺して得られた値をダイヤグラムの質問毎の直線（半径）上にとり表わしたものである。

質問毎の直線（半径）の中間点を０とし，０から外側の方向を正（プラス）の傾向，０から円の中心点側の方向を負（マイナス）の傾向として，Ｘ群の値，Ｙ群の値をそれぞれ半径上に表わし，Ｘ群は実線でＹ群は破線で結んだものである。

このように表わして見ると，Ｘ群とＹ群との間にある大きな差が一目にしてとらえることができるし，合わせて両方とも芳しいとはいえない要素についても即座にとらえることができる。このダイヤグラムから，Ｘ群とＹ群の特徴を読みとり進路指導の改善点として以下の７つを指摘することができる。

(1)　いずれの学校群とも，値が７０に満たない質問については早急にその対策を講じ，充実していく必要がある。

表１　Ｘ群とＹ群との間に大きな差が見られる質問項目

（数字は％）

	Ｘ　群	Ｙ　群
質問①　あなたは，あなたの学校の教職員が共通理解のもとに協力し合って，進路指導にあたっていると思いますか。		
①思　　う。	24.5	5.0
②大体思う。	55.3	24.4
③どちらともいえない。	14.5	34.4
④あまり思わない。	3.8	28.9
⑤思わない。	0.6	7.2
質問②　あなたは，進路指導を進めるにあたって学校や学年の進路指導の目標・計画にしたがっていますか。		
①したがっている。	20.1	10.0
②大体したがっている。	61.0	32.8
③どちらともいえない。	11.3	34.4
④あまりしたがっていない。	4.4	17.2
⑤したがっていない。	0	1.7
質問③　あなたの学校では，進路指導に関する係（たとえば進路指導部）が校務分掌として位置づけられていますか。		
①位置づけられている。	89.9	76.7
②位置づけられていない。	8.8	23.3
質問④　あなたは，あなたの学校の進路指導の現状についてどう思いますか。		
①よいと思う。	11.3	3.3
②大体よいと思う。	66.0	26.1
③どちらともいえない。	17.0	43.3
④あまりよいとは思わない。	3.8	25.0
⑤よいとは思わない。	0.6	2.2

	Ｘ　群	Ｙ　群
質問⑤　あなたは，あなたの学校の進路指導が第３学年中心に行われていると思いますか。		
①思　　う。	39.0	69.4
②思わない。	49.1	22.8
③わからない。	3.8	5.0
質問⑥　あなたは，あなたの学校の生徒が進路の悩みについて，どの先生にも相談できるようになっていると思いますか。		
①思　　う。	13.8	6.1
②大体思う。	34.6	16.7
③どちらともいえない。	22.0	25.0
④あまり思わない。	20.1	35.6
⑤思わない。	7.5	15.6
質問⑪　あなたは，あなたの学校の進路指導係が，あなたの期待にこたえていると思いますか。		
①思　　う。	23.3	7.8
②やや思う。	30.2	22.8
③どちらともいえない。	25.8	36.7
④あまり思わない。	5.7	18.9
⑤思わない。	3.8	7.8
質問⑳　あなたは，あなたの学校で今年度（１０月末現在）行われた進路指導に関する研修に参加したことがありますか。		
①参加したことがある。	56.5	24.4
②参加したことがない。	41.5	74.4

	X　群	Y　群		X　群	Y　群
質問㉒　あなたは，あなたの学校の職員会議や研修会で進路指導について話し合われたことが，指導に生かされていると思いますか。			①生かされていると思う。	29.6	13.3
			②大体生かされていると思う。	51.6	31.1
			③どちらともいえない。	13.8	33.9
			④あまり生かされていないと思う。	1.3	13.9
			⑤生かされていない。	0	2.8

(2)　質問①は教職員の進路指導に関する共通理解と協力体制についてのものである。学校が経営組織体ということを考えればX群の76.7の値は納得はいく。しかしY群の23.9は大きな問題である。

学校の教育目標の達成をはかるにも，一つの仕事を成功させるためにも教職員の共通理解が不可欠であり，そして，その共通理解ができた上に教職員の協力体制が確立されていくのがみちすじであるからである。このことからY群の学校は，まず教職員の一人一人に共通理解をはかることに力点を置くことである。

(3)　質問㉒は職員会議や研修会で話し合われたことが指導に生かされているかという教員の実践意欲にかかわる問題である。X群の79.9は理解できるが，Y群の27.7は職員会議や研修会を開いても意味がないということであろうか。

(4)　質問②，⑤，⑥の三つは，進路指導の進め方についてのものである。これについてのダイヤグラムをみると，質問⑤，⑥は両方の学校群とも大きく落ち込み，Y群は負の値にさえなっている。

日頃，進路指導を進めるとき第3学年だけが中心になったり，生徒が進路の悩みをどの学年の教師にも相談することができないような体制は大きな問題である。

ともすると中学校の第3学年は目前の上級学校への進学がちらついていることからこうした反応結果になったものと思われるが，当センターの昨年度の報告書にある各学年10時間の授業時数とそこにあげてある内容をきちんと指導することがこれの解決の第一歩である。

また，生徒の進路の悩みについても当該学年の担任だけ，あるいは学級担任のみが相談にのるというのではなく，校内のどの教師にも相談できるという雰囲気づくりと体制づくりが大事である。

それにはそれだけの力量をどの教師も備えていることが大事であるとともに，学年セクトに陥らない開かれた学年，開かれた職員室にすることである。

質問②は進路指導を進めるにあたって学校や学年の進路指導の目標・計画にしたがっているかということであるが，Y群23.9，この値をみると一見Y群だけが低いようにみえるが，しかしX群も高いとはいえない。どの学校でも最適な進路指導，そして効果のあがる進路指導を意図し立てた目標・計画のはずである。本来ならばX群，Y群を問わず100に近い値でなければならないのにこのようになっているのは

①　進路指導の重要性についての意識が低く，十分指導がなされていないと思われること。

②　進路指導計画の内容そのものが実情に合わず，そのまま活用できず改善の必要があること。

と考えてよいのではないだろうか。いずれにしても，早急に改善しなければならないことである。

(5)　質問⑪，③は，進路指導係の組織，機構とその機能に関することである。前でも触れたが学校が

経営の組織体という考えに立つなら，目標を達成するにはこの組織・機構すなわち校務分掌はその要といえよう。経営組織体の要である校務分掌に道路指導に関する係や部が設置されていないというのは大きな問題である。この質問③の値は１００で然るべきである。

質問 ⑪ の進路指導係の役割についてもＸ群，Ｙ群とものぞましい状態にあるとはいえないだろう。進路指導主事は生徒の進路の指導に関する事項をつかさどり，そのことについての連絡調整及び指導，助言に当たることとされている。同じく進路指導係の一員であるならば，これらを把握しながら日頃の進路指導に目を配り，十分でない内容は何か，担任教師が進路指導でどんなことを要求しているかなどを素早くとらえ，それぞれの教材の準備や情報等をできるだけ整え活用しやすくしてやることである。そのことが校務分掌を受け持つ一員としての責務を果たすことである。

⑥ 質問 ⑳ は校内における進路指導の研修である。これもダイヤグラムが示すようにいずれの学校群も進路指導についての研修を重視しているとはいい難い。

上の(2)，(3)でも述べたがこうした研修を重視することによって，仲間との共通理解をはかることができるし，協働の意欲や進路指導に対する教師のモラールを高めることもできる。また学年セクトを排除し，協力体制を確立することのきっかけや足場ともなるものであるから，大事にしていく必要がある。

(7) 最後にダイヤグラムにはないがリーダーシップについてあげたい。学校の進路指導のねらいを実現していくには進路指導のリーダーに負うところが大きい。何事においてもそうだがリーダーの姿勢と日頃の言動如何によって事の明暗を決するとさえいわれる。進路指導にしても例外ではなかろう。

リーダーはそういった意味で自分の職務というものを自覚した上で事に当たることである。どうすれば全教職員が進路指導に目を向け，そのねらいを理解し日常の指導へと行動してくれるのか。それには，これまでの進路指導の実情をつぶさに検討するとともに現在の生徒の実態，親の意識等をふまえながら，新たな発想で進路指導本来のあり方に根ざした進路指導の設計図を描きそれにそった実践を展開していくことである。

Ⅳ　のぞましい進路指導を行うために

1.　進路指導全体計画の見直しと改善

(1) 全体計画の吟味とその実践

各学校では，年度当初に学校の教育目標に沿った進路指導目標が設定され，その達成を目指すための全体計画がつくられるわけである。しかし，新年度のスタートという慌ただしい時期でもあり，ややもすると，全体計画の内容を十分に吟味する機会が得られぬまま進路指導が展開されることになりがちである。

進路指導全体計画の提起者は，繁雑さから単に「前年度のとおり」とせず，これまでの進路指導を振り返り，細部についての改善点を取り入れた内容になるよう努力したいものである。

進路指導は「全教育活動」を通して行われるものであるから，全体計画の内容については，学校の実態を十分把握し，特定の学年や教科，領域等に重点をおきすぎてはならず，生徒の人生設計について調和のとれたものでありたい。また，教師の実践が可能であり共感を得られる内容でなければ，その全体計画は全く意味をなさず，単なるプログラムにすぎない。したがって，全体計画の提起者は，それらのことを十分留意しながら立案につとめるべきである。

(2) 「学級指導」における進路指導計画

各学年ともに，「学級指導」においては進路についての学習をできるだけ多く行うことがのぞましく，その具体的指導例を昨年度の本研究報告書で提示した。

限られた時間数の中で，進路に関した学習を多く確保することは，教師にとって容易でないが，年間指導計画表にきちんと位置づけて実践していきたいものである。なぜなら，進路についての学習をある程度まとめて行うには，やはり「学級指導」が最適と思われるからである。

学習の内容は，各学年の生徒の発達段階に応じたものとし，生徒が自分の適性を知り，それを将来の職業に結びつけて考えながら「生きがい」を見いだしていくとともに，進路を自分で切り開こうとする意欲が育つことを目指したものでありたい。

2.　進路指導体制の見直しと改善

進路指導主事は，進路指導目標の設定や，全体計画の立案にあたりその中心的存在にならなくてはいけない。また，「教科」「道徳」「特別活動」その他校内のすべての教育活動において，進路指導目標や全体計画に基づいた実践が行われているかを見守りながら，その都度適切な指導・助言を行っていきたいものである。

進路指導主事は，常日頃教師や生徒・親からの信頼が厚く，進路に関した相談を持ち込まれるような存在であることがのぞましいが，そのためには正確な知識や資料に裏づけられた深みのある指導，助言

が期待されてくる。したがって進路指導主事は，社会の情勢を正しく把握しそれを分析し得る能力を身につけるよう努めたいものである。

また，生徒に対して「生き方」を啓発する内容のものや，時宜を得た情報等を併せて掲載した「通信」を定期的に発行している進路指導主事もいるが，きわめて有意義な実践であり敬意を表したい。

次に，組織としての進路指導係の機能を考えてみたい。

係に所属する教師は，進路指導主事を中心に一丸となって業務にあたらなければならない。もし係の教師間の進路指導に関する意志統一がなされていない状態にあるとすれば，組織としての運営方針を打ち出すことができないばかりか，全教師間の共通理解や協力体制などはのぞめるはずがない。

学校によっては，校内に進路指導室（進路相談室）を設け，進路に関する資料や情報を取り揃えて教師や生徒・親の利用に供しており，たいへんのぞましいことである。できれば時間の許す限り，係の教師が在室し，利用者に対する指導・助言にあたるような運営がなされれば，より効果的と思われる。

進路指導室に取り揃える資料も，単に上級学校への入学案内書のようなものだけでなく，人生の生き方を考えさせる書物等も備えておきたい。また，生徒の５年１０年先を見越した進路指導という観点から，専門的な職業や国家資格とそれについての道すじをあらわす資料を備えることも必要と思われる。このことは，生徒の人生設計に対する関心を高めるうえでも有意義なことであろう。

進路指導室の運営のあり方であるが，ともすると，「入試相談室」的機能のみに陥りやすいので，係の教師は日頃留意したいものである。

3. 教職員の共通理解と協力体制

各教師が，独自の考え方に基づいた進路指導を個々に行うとすれば，進路指導目標や全体計画は全く無意味になってしまうとともに，生徒や親の教師に対する信頼感を喪失させ，無用の混乱を来しかねない。

そこで，教師間の進路指導における共通理解の重要性が叫ばれてくるのである。

進路指導についての教師の力量を，上級学校への合格率や個々の生活の進学先だけで評価することは誤りであるが，もし教師間にもそのような評価が存在するとしたら，それは払拭されなければならない。

進路指導の本質は，前述したように「生きがい」を見いださせ，自分で進路を選択できる能力を育成することにあるからである。

生徒の学力が向上することは，単に上級学校への入学を果たすことだけでなく，将来志す社会的使命の実現に一歩近づくこと，また，そのことが使命を果たすうえでの血や肉となることを，教師は生徒に強く訴えていきたいものである。

個々の生徒の成績と志望する高等学校名を見比べ進学先を決定することだけが進路指導ではないということを，教師は十分に理解し確認し合いたいものである。

世の中は，多くの人々が社会的役割としての職業につき，お互いに手を取り合って生きることで成り立つ，いわゆる「共存・共生」の原理を，まず教師自らがきちんと理解していなければならない。そうでなければ，いくら「職業に貴賤はない」などと生徒に説いても，説得力に欠けるのではないだろうか。

教師は，自身の人生観・世界観に立ったいわゆる「持ち味」を発揮した進路指導を行っていきたいものであるが，そのためには視野を広げることを心がけたいものである。一般的にではあるが，教師の多くは教職以外の職域に疎い傾向があるといわれる。また日常の職務内容からも外界に対して閉鎖性を帯びやすい。そこに教師の視野を狭める要因が潜んでいるのではないだろうか。

視野を広げるための試みとしては多々あろうが，まず地域に住む人々や教職以外の多くの人々と心を開いて語り合う機会をできるだけ多くもちたいものである。

以上述べたようなことについて，教師間の理解が深まれば，進路指導における協力体制はさらに整い進路指導即進学指導という図式から脱却することに一歩近づくことができるのではないだろうか。

4. 進路指導に関する研修

進路指導に関する研修の機会をもった学校ほど，指導体制や教師の意識の面ですぐれていることが，今回の調査で明らかになった。

研修の機会を多くもつことは，進路指導目標や全体計画についての教師間の共通理解を深めるとともに，各教師の指導上の悩み等を解決するうえできわめて有意義なことである。

この研修の運営については，進路指導主事（係）がイニシアティブをとることがのぞましい。できれば年度当初に学校の年間計画表に位置づけたいものである。

研修の内容については，教師の進路指導における共通理解を深め，協力体制の確立に資するものになろうが，時宜を得たテーマを設けたり，教職以外の外部講師を招くことなども意義のあることである。

研修によって，進路指導にかかわる諸問題を一気に解決することはできなくても，研修を重ねるうちに，少しずつ進路指導の本来のあり方に近づくのではないだろうか。

V　研究のこれからの課題

1.　小学校・中学校・高等学校の一貫した進路指導

進路指導を小学校高学年から行うことについて，多くの教師が賛成であることが今回の調査でわかった。

小学校時代から夢や希望を持ち，その実現に向けてそれなりの真摯な努力を続けることは意義のあることであり，心の豊かさも併せて育むことに結びつくのではないだろうか。このことからも，進路についての基礎的学習を小学校時代から始めても，決して早すぎるということはなく，むしろのぞましいことといえよう。

本研究では，中学校における進路指導の実態を調査し，改善の方策について考察した。しかし，高等学校進学後の中途退学者が，本県では 500 人（昭和６０年度）に迫ろうとしていることを見過すわけにはいかない。このことと，中学校における進路指導の関係がどう結びつくかについては，本研究だけでは明らかにできないが，小学校・中学校・高等学校の一貫した進路指導というものが，それらの諸問題を少しでも解消することにつながるのではないだろうか。

2.　高等学校における進路指導

次年度は，高等学校の協力の下に，進路指導の実態調査を行い，中学校の進路指導と結びつけながら考察するとともに，実社会や大学等を目前にして大きな決断を迫られる生徒と，それを援助する教師の指導がどう嚙み合いながら進路指導がなされているか，ということについて研究を進めていきたい。

昭和６２年３月２０日　印　刷
昭和６２年３月２５日　発　行

発 行 所　山形県教育センター
〒994　天童市大字山元字犬倉津２５１５
TEL　0236(54)2155～9

印 刷 所　中央印刷株式会社　天童営業所
天童市久野本４丁目 15－27
TEL　0236(54)6263